

## 第12章 トモダチ作戦 6

「東日本が壊滅する危険を米国は懸念する」。東京に放射能の雲が到達することも想定、米国は日本が事態をコントロールできていないと危機感を抱き、藤崎駐米大使を國務省に呼ぶ。

## 第13章 海軍 VS 國務省 42

米国も対応をめぐり厳しい内部対立があった。ゼロ・リスクを主張する海軍と、日米同盟への長期的影響を考慮する國務省。最悪シナリオの評価は、大統領科学技術担当補佐官に委ねられる。

## 第14章 ヨコスカ・シヨツク 78

横須賀海軍基地で放射能が検出された。高級将校の家族はわれ先に出国、放射能汚染を恐れる空母ジョージ・ワシントンも横須賀を離脱。東京の米大使館もパニックの一步手前まで。

## 第15章 ホソノ・プロセス 116

事故当初、各官庁は情報を共有せず、米国側も混乱。日米の情報を一元化し共有する場が細野豪志らによってようやく設けられる。米国側はそれを「ホソノ・プロセス」と名付けた。

## 第16章 最悪のシナリオ 157

14日の夕方の吉田所長からの動揺した電話が細野に最悪シナリオの準備を決定させる。一方自衛隊も独自に最悪の想定を始める。首都にまで被害が及ぶ場合の首相談話も準備。

## 第17章 キリン登場 203

58メートルの長いアームで、一点にむけて生コンを射出する生コン圧送車キリン。これを、原子炉冷却放水につかえないか。無人機、ロボット、赤外線サーモグラフィなどの技術も動員。

## 第18章 SPEEDIは動いているか 253

放射性物質の広がりや気象条件などをとに迅速に予測するシステムSPEEDI。放射性雲は、浪江町へと移動し、雨雪となって地上におちたが、その予測は住民には知らされない。

## 第19章 飯館村異変 298

SPEEDIが当初公表されなかった理由。それは、放射能の放出源情報がなかったためだった。実際のモニタリングから逆推定できないかという枝野のアイデアを専門家が試みる。

## 第20章 計画的避難区域 337

4月に入ると一過性の放射能被ばくではなく、累積性の放射能被ばくを避けるための避難が必要になってきた。だが、その線引きは、県、文部科学省などの思惑によって困難を極める。

## 第21章 落城一日 392

東電社長の清水は「築城十年落城一日」と言った。がしかし、撤退を官邸に執拗にもちかけた清水の行動様式は、現場の人間が死んだ時の責任回避という東電文化を象徴するのでは？

## 終章

### 神の御加護

430

チェルノブイリの事故はソ連社会の病巣を浮き彫りにさせたが、福島第一原発事故は日本の組織社会の問題点をあぶり出した。危機におけるリーダーシップとは何か？

あとがき

460

お話を伺った方々

466

参考資料・参考文献

471

## 上巻目次

プロローグ

序章

全交流電源喪失

第1章

保安院検査官はなぜ逃げたか

第2章

原子力緊急事態宣言

第3章

ベント

第4章

1号機水素爆発

第5章

住民避難

第6章

危機の霧

第7章

3号機水素爆発

第8章

運命の日

第9章

対策統合本部

第10章

自衛隊という「最後の砦」

第11章

放水

装幀

永井翔

カバーイラスト

増田寛